

Title	花山だより(八月)
Author(s)	星見山人
Citation	天界 = The heavens (1935), 15(174): 471-471
Issue Date	1935-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167108
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

花 山 だ よ り (八月)

休暇中にて一般に山も淋しい。所が此處に痛快な事は、既に新聞等にて御承知の事と思ふが、黄道光課の國際中央局が吾が花山に置かれる様になつた事である。天文協會の黄道光課觀測部員諸氏の熱心なる努力の賜であり、之の觀測部員を指導養成された山本臺長の偉大なる功績に對する當然の報酬ではあるが、我々は改めて花山の爲め、否日本の斯學の爲め萬々歳を叫ばざるを得ない。尙ほ又此れに關聯して黄道光の觀測に適した瀬戸内海沿岸各地から、之の中央局設置勧誘運動が起つてゐる由である。

明年六月19日の皆既日食に對する準備も着々として進み、24日午後花山からの遠征隊の計畫が略々出来上り、花山急報にて發表した様に9班に別れて北海道全般に擴がる大觀測網を形作る事となつた。そして其の第1回打合せ會が31日午後より樂友會館に於いて開かれた。一方京阪神地方のアマチュア天文家を指導する意味の日食對策委員會が組織され、其の第1回會合は九月に行はれる豫定である。

25日夜にゲンビースブルック彗星の發見電報が到達した。光度は14等。教室の荒木博士と栗原先生が中旬頃に5日程、夏期休暇を利用して山に來られた。日本アルプスを縦走された由にて日に焼けて眞墨になつてゐられる。28日からは倉敷から休暇歸洛された小山先生が約一週間山に來られる。又た1日から7日まで開かれた夏季大學の上島先生の講義聽講の爲め神戸星見臺の荻部氏が來臺宿泊され、山から通はれた。

扱て吾々は公文先生御一家遭難の悲しき御知らせをしなければならない。10日から降り續いた210ミリと言ふ大雨に天文臺の直ぐ下にある稚兒ヶ池が11日3時決潰し、その下流に當る北花山に住居されてゐた同先生一家は一瞬にして家諸共に押し流され、辛じて取りすがつた所は、ずつと下流の幸ひにして流されなかつた家の屋根の上であつた由である。斯くて悲しくも遂に二令嬢は水渦の犠牲となられた。同先生夫妻並に坊ちゃんは負傷はされたが奇蹟的に助かつた事は不幸中の幸であつた。吾人は謹んで御見舞の辭を述べる次第である。(星見山人)